SCARLET PRINCESS　体に爆弾を埋められた無職がなんだかんだで世界を救うまで

ひん（再就職）

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とにかく人相が悪く運も無い青年、最上光（モガミヒカル）は仕事も家も金もない。

仕舞いには成り行きでとんでもない厄介ごとを抱えるハメになる。

脅迫まがいの半強制で就職させられたのはとんでもないところで、魑魅魍魎や化け物や怪人には食われそうになり、隙あらば殺そうとしてくる同僚に囲まれる。

非人道的逮捕から始まりなんやかんやで世界を救う現代ＳＦオカルトホラーごった煮のアポカリプスコメディ。

行くも地獄行かぬも地獄に叩き落とされた非力な青年の明日はどっちだ。

ご都合な主人公覚醒とか完全に無いです。

ぶっちゃけ某財団的なやつ

目次

確保 ―――― 1
インタビュー ―――― 6
3 ―――― 15

確保

白ティーにジーンズのファッションセンスの欠片もない格好でとある青年が夜中の私鉄に乗っていた。

登りの終電は空きが多く座れているのが幸いだ。

いや、住みかを追い出されたので幸福とは言えない。

そもそも人相が悪いを通り越して連続殺人犯のような目付きをしているので誰も近くに座ろうとしてない。

「はあ……」

ため息ばかり出る。

なんでこんなことになったんだ。

顔が悪いし運も悪い。

「はあ……」

やっぱり僕が悪いのか。

『間もなく〜終点〜終点〜お降りのお客様はーー』

果てもなくマイナスな思考を車掌のアナウンスで中断させられた。

半強制的に降りさせられたのは都心の一角。
財布にはネットカフェに泊まる金も無い。
今日日、公園で寝泊まりなんてしたら、パトロールの警察官に職務質問されて交番で一泊だ。
僕は知っているぞ。
奴らは目付きが悪いというだけで犯罪者扱いしてきて応援を呼び、任意同行の名のもとに強制連行するのだ。
経験済みだぞ。
前に住んでいたアパートは家賃が払えず追い出されたので行くあてもない。
静かな住宅街を歩く。
あれは何を考えてろくに金も持たせず送り出したんだ。
ふつふつと怒りが、というかやるせなさがわいてくる。
一周まわって、ふざけやがってという感情も出てこない。
「ああ……」
腹が減ったけどラーメン屋に入る小銭すら持ってないんだ。
住宅街を適当に歩く。
たまにパリンパリンとガラスが割れるような音が聴こえてくる。

この辺は治安が悪いのか。
フラフラとしながら全く知らない土地を歩く。
思い返せば腹が減ってるだけなのでまだマシだった。
この後でもっと酷い目に遭うとも知らずのんきにしていた。
十字路にさしかかった途端、三方から真っ黒いバンが突っ込んできて横付けした。
ドカドカと黒い服を着た奴等が十人以上降りてきてなぜか囲まれた。
「は？」
全員サブマシンガンをこちらに構えている。
ゴツくて黒光りするそれらはオモチャっぽくない。
どうみてもガチのやつだ。
ここは日本だ。
いつから自由の国になったんだ。
銃刀法はどうなっているんだ。
「対象を発見。第一物理段階より拘束を試みる」
無線か何かに話しかけている。
狙われる対象になるようなことはしてない。
映画や海外ドラマで見た特殊部隊の軍服に近いけど、顔の周りをフルスモークのバイ

ザーで完全に隠したＳＦチックな格好で、構えた銃口の隣から出てるレーザーポインターは額やら胸やらをぴったり狙っている。

「え？」

理解が追いつかない。

「動くな!!」

口元も見えないので誰が言ったか、迫真の声で警告された。

なんだこれは。

僕が誰が傷つけたか。

法も犯してない。

人相が悪いというだけで銃を向けられて恫喝されるのはあまりに理不尽だ。

比較的大人しい自負がある僕でも憤慨する。

非難してやりたい。

「待って欲しい。僕は」

なにもしてない。

「あばばばばばばばばば!!!」

言い切れなかった。

何本も飛んできた針みたいなものが全身に刺さって、激痛と一緒に変な声が出て、そ

れで意識を失った。

インタビュー

目覚めると顔から爪先まで包帯のような布でグルグル巻きにして椅子に座らされていた。

「！」

胸がヒリヒリするのは痺れさせられた後遺症か。

なんてこった、拉致されたようだ。

なぜか舌も痺れていて声も出せやしない。

「!?!?」

不運もここまで来たら尋常じゃない。

元来感情の起伏が少なくて、しかも誘拐より不思議な体験をしたきたばかりの光でなければ、パニックを起こしていただろう。

プシュッと空気が抜ける音がして誰かが入ってきたらしい。

足音はしなかったが尋常でないほど気配が濃い。

その誰かは向かいにあるのだろう椅子へ雑に座った。

僕とその人物の間で何かを置く硬質な音がした。

机でもあるのだろう。
いよいよ取調室じみてきた。
頭に見取り図を思い描いていると、硬い棒のようなもので額を小突かれた。
「死にたくないならギャーギャー騒ぐな」
ドスの効いた、若い女の声だった。
とりあえず言われた通りに頷く。
「今から口の拘束を外す。下手な真似をした瞬間てめえの首を飛ばして焼却する。訊かれたことだけに答えろ」
連れてこられた経緯といい、なにもかもが非現実的で物騒だ。
さらに壊滅的にガラが悪い。
さぞかし性根が曲がったような顔をしていることだろう。
首まで背もたれに固定され、文字通り手も足も出ないのでまた小さく頷くしかない。
彼女がフィンガースナップを鳴らすと顎を覆っていた部分の布がジョキリと勝手に切れて外れた。
「で、所属団体は？　人間爆弾と来たら神無月インダストリーか富士機関か？　どうせ狙いは結界とかだろ。時間がねえからさっさと吐けやオラ」
「は？　人間爆弾？」

なんだそりゃ。
状況が飲み込めない。
というか、いきなり拉致されて第一声がこれで飲み込めてたまるかい。
激動過ぎる。
脚本家がいたら導入が雑だと怒鳴りたい。
「よく聞け。どこで拾ったのか知らねえけどな、その右腕はこの世に出しちゃおけねえもんだ」
「いや、あの、何かの間違いじゃないですか……」
「すっとぼけんなテロ野郎。そんなもんブラブラさせて東京に来るやつがただの民間人のはずねえだろうが！」
恫喝されると口をパクパクさせてビビる僕は小市民だ。
ヤンキー超怖い。
「最上光（モガミヒカル）二十四歳。会社が倒産してから働かず、ここ約一ヶ月行方不明。戸籍に改竄などの不審な痕跡はなし。色々植え付ける時間はあったってワケだ」
プロフィールを読み上げられる。
スパイ映画みたいな単語がチラホラ。
「どこかのテロリストと勘違いしてないですか。僕は一般人なんですって。大体ここは

どこであなたは誰だ？」
「ホームラン級のバカかてめえは。黙ってろ」
また硬い棒で額を殴られた。
酷い。
吐けと言われたり黙れと言われたり、事情を聞こうという姿勢がまるで無い。
人権無視も甚だしいぞ。
「次元転移……領域持ち……現実改変か下手したら隠れた神格の線まであるか」
ヤバイ、もしかしてイッちゃってる系のカルトな人たちに誘拐されたのか。
そんな集まりが銃を持ち歩いているなんて日本は大丈夫じゃなさそうだ。
光は世相に想いを馳せて現実から目を逸らした。
上の方でスピーカーがブーと鳴る。
『交代だ』
「はァ？　今私が尋問してんのが見えねえのか？」
ボイスチェンジャーを通した合成音声にご機嫌斜めな目の前の女が食って掛かった。
内輪揉めか。
変な団体に捕まって、簀巻きにされて、お次はなんだ。
もうどうにでもな～れ。

『口論は無益だよ』
「……クソが」
力関係ははっきりしてるのか意外にもガラの悪い方が簡単に退き下がった。
「チッ！」
盛大な舌打ちをして部屋を出ていく。
出る間際に壁かゴミ箱か何かを蹴っ飛ばしたような破壊音を残していった。
ヒェッ。
「やあ、選手交代だ」
うって変わって今度はやたらとフレンドリーな印象の女が話しかけてきた。
「荒っぽくしてごめんね。さっきの彼女、虫の居どころがすごく悪いんだよ」
声がこもっていて今一掴めないが、会話の間の取り方からしてスピーカーで喋っていた人物のような気もする。
「ふう、息苦しいなあこれ。いくら戦闘用だっていっても改良しなきゃ駄目だね」
カチャカチャプシュプシュやって何かを取り外し、声が明瞭になった。
即座にスピーカーから大音量で誰かが怒鳴る。
『汚染防護規定に違反しています！　ただちにマスクを装着してください！』
「いいからいいから。こんなの着けてたら調査にならないでしょ。異変を感じたら適切

な処置をとってくれればいいさ」
『……テスト後に診断を受けてください。いいですね？』
「オーケイ」
　現場に出たがるタイプの権力者なのかスピーカー側をあっさり言い負かして了解を取り付けた。
「さて、本題だ。君は虐殺もせずに電車に乗って、その後は住宅街を歩いていたことから進んで誰かを殺そうとしたり何かを壊そうとする素振りはなかった。もっと言えば、その気であれば私がこの部屋に入った瞬間に殺せたかも知れないが、やらなかった。だから普通に話が出来ると仮定してインタビューしたい。正直に話してくれると嬉しい」
　良い刑事と悪い刑事の飴と鞭で白状させる手法が頭をよぎる。
　殺すだの虐殺だのという危険な単語の羅列は置いておくとして、話が分かりそうな人物と接触したチャンスは生かしたい。
　平静を装い光は回答する。
「……最初からそうして欲しかったんですが。いきなり撃つのは法治国家としてどうなんです？」
「すまないがそれは出来ない決まりなんだ。世の中には交渉出来ない相手が多すぎる。君がお喋りに応じてくれただけで嬉しいよ。手違いがないか確認するけど、君は最上光

で間違いないかな？」
「はい」
「私は東（アズマ）。東博士とでも呼んでくれ。長い付き合いになると思うからよろしくね」
粗暴な本性を隠してるようなこともなさそうで、前任者より話しやすいのは大いにありがたい。
誤解が解けるなら何でも訊いて欲しい。
僕はやましいことは何もしていないんだ。
「次に、現在所属している特別な団体、企業、宗教とかはあるかな？」
「うっ……」
想定外な角度の初撃で結構胸を抉られた。
無職になんと無慈悲な質問を。
僕は今年で二十五にもなるのに仕事をしていない。
不採用通知は三桁の大台を余裕で突破し、やっと面接まで持ち込んだら人相の悪さが邪魔をして不採用。
再就職の希望は潰えた。
特に邪気があるとまで言いやがったあの人事、顔を見ただけで僕の何がわかるというのやら。

もうどうでもよくなって、通販と宅配に頼り貯金を食い潰す引きこもりになっていた。

求職中とでも言おうか。

見栄を張った嘘を練っていると東博士の手前で何かがガシャガシャ動いた。

「は、働いてません……」

ビビって光は本当の事を言った。

しかし東博士は職歴には興味がないようで、ここ最近の変化の方にそそられている。

「ふむふむ。ではその右手に関することを教えて欲しい。いつどこで手に入れたのか。心当たりがなければ些細なことでも構わないよ」

気になっているのは右手だ。

特に厳重に固められて指の関節のひとつどころか、麻酔をかけられたみたいに感覚が無くなって動かせないそれ。

「……信じるかは自由ですが、奥多摩で貰いました」

「貰ったと。誰からかね？」

「奥多摩の屋敷に住んでいた鬼にです」

問題はこれだ。

ちょっとどころじゃない神秘的な暮らしをここ一ヶ月ほどしたが、まさかこんなに大

問題にされるとは考えもしなかった。

3

グイグイ来る東に光はたじろぎつつも対応していた。
「して、その鬼とは？」
「昔話に出る角が生えた鬼ですよ。彼女の家で居候している間に渡されました。ああ、正しくは胸に埋め込まれたんだった」
真面目くさってアホな妖怪談義。
これは夢だ、悪い夢。
この人もなんでこう、熱心に訊いてくるかなあ。
吹き出してしまうかたわごとと一蹴するものを、真剣に聞き出そうとしてくる。
しかし思い返しても話すなとは言われてないし、悪いことをした覚えはない。
どうせ信じやしないさ。
こうなったら全部ぶちまけてやる。
光はヤケクソ気味に決めた。
「ほう、彼女と言ったね。その鬼は女性だったのかい？」
「ちょ、ちょっと待って下さい、こんなトンチキを本気で信じるんですか？」

「トンチキって……まあいい。ヨタ話であっても我々は本気で取り組む。間接直接問わず、我々が彼らと接触した事例はほとんど無い。ごく僅かなものに関与が疑われる程度の存在だった。幸い君は本物だ。従って君の証言や身体情報はとても新鮮だよ最上君」

我々と言ったか？

それなりに大きい団体なのか？

彼女のようなものを調べている？

「紅染め、学会、神無月、戦線、機関、どれかに特筆すべき覚えは？」

「いえ、ありません」

胸がモニョモニョする中二病な団体さんが沢山あるようじゃないか。

日本の未来は虹色だ。

「今、なにがしたいとかの欲求はあるかい？」

「お腹が空いたので何か食べたいです」

昼から何も食べていない。

そもそも今が何時なのかも不明だ。

空きっ腹がキツいのでそれなりの時間が経っている気はする。

「食べるのは、普通の食べ物？　それとも人間？」

アホ抜かせ。

「まさか、普通に肉とか米です。彼女は昔は人を食べていたことがあるそうですが、僕は普通の人間なんで」
「ラーメンか。手早く食べられるから私も好きだよ。あーもしもし、大至急食堂からラーメンを持ってきてくれ。二つだ」
　この人もここで食べるつもりなのか。
　人をレクター博士級の危険人物扱いした割には警戒されていないというか、肝っ玉が座っているな。
「暴れたいって気持ちは現在、もしくは未来的に起こりえるかい？」
「既に今訳がわからない状況なのでかなり苛立ってますが、これといって暴れようとは思ってません」
　百歩譲って部屋に入れられるのは認めても、自由に用も足せないのは勘弁してほしい。
「よし。じゃあ今から拘束を解いていくよ。だからといって急に立ち上がったり私を殺そうとしたらいけないよ？　異常があればすぐにこの部屋に硫酸や毒ガスが流し込まれるし、殺すのも無駄だからよしなよ」
　猛烈な報復を宣言されてから反逆する根性は無い。
　とにかく自由になるならありがたい。

そんなホイホイ解放するなら、なぜこんなガチガチに拘束したか疑問だが。
「第五から第三まで封印解除」
『しかし……』
やっぱりマズそうだ。
スピーカーの誰かと東がまた揉めた。
「やってくれ」
東博士は押しが強い。
覚えた。
外側から、四肢の末端にかけて自由になっていき、最後に眼だ。
瞬きして眩しさに眼を慣らした。
宇宙服に似ていてゴテゴテした奇妙な黒いものを着た妙齢の美女がステンレスのイスに座り脚を組んでいた。
その服は簡単に脱げるらしく、上半身をはだけて中身の白衣姿を出している。
ノンフレームの眼鏡が無くとも知的な印象の瞳は野良猫のように奔放に光の体を舐め回すように見ている。
歳は三十前後で白衣の下のTシャツとデニムといった緩い格好がちぐはぐさを加速させる。

机には被っていたと思われるヘルメットと揃ってないルービックキューブを置いていた。
光は自由になった首を回して現状を確認する。
グレーの金属の壁が六面を覆う独房。
天井のＬＥＤだけが光源で窓なんか無い。
床に溶接された机を挟んだ椅子で向かい合っている。
「すまないが右手は自由にしてあげられない。それは我慢してほしい。心境に変化はあるかな？」
「スッキリしました」
「それはよかった。さて最上君、落ち着いて聞いてくれ。君はとても不味い状況にある」
そりゃそうでしょうね。
光は口まで出かかった言葉を飲み込んで違う言葉を用意した。
「右手が原因ということですか？」
「その通り。それは君の考えるよりはるかに危険な代物だ。もし街角に核爆弾が転がっていたらどう思うかな？」
「そりゃあ、急いで回収して分解するなりしないと危ないですね」
「その通り。その核爆弾が今の君だ。自由な意思を持って歩き回り、いつ起爆するかも

わからない核爆弾がどれほど危ないかは言うまでもないだろう」
ルービックキューブが自律して動作している。
まだまだ揃わない。
極小の確率で揃う偶然を楽しむとかそういう系のインテリアか？
「ウチの観測チームが都心に突撃する君の存在をキャッチした。率直に言うとそれで地球は滅びかけた。当直が血の泡を吹いてなんとかしたがね」
眼鏡のズレを直す東はブッ飛んだことをまたもや言い出す。
話のスケールがデカすぎないか。
「滅びるとは具体的にどういう……？」
「詳しくは教えられないけど、大地震が直撃するよりヤバいことになりかけたよ。君が気絶している間の分析で、我々が抱えた問題の根源が右手にあることも突き止めた」
「それでコレですか」
キッチンミトンよろしく分厚くカバーされている右手を机に乗せる。
「そうだ。我々からしたら、点火してあるダイナマイト抱えた見知らぬ人物が玄関にタッチダウンしたようなものだよ。ウルトラ級の不都合が起きる前に確保しに行ったというわけだ。少々手荒になったことは謝るよ」
「東博士はこの手が怖くないんですか？」

東は実に堂々と面会している。
「危険には慣れっこなのさ。ま、それと素肌で触れ合えば問答無用で死亡するだろうがね」
ヘルメットを右手の指先でコツコツ叩いて微笑む東の本心は分からない。
「今後の君の処遇について話す前に、我々について説明しておこうか。我々は現実維持局。これでもれっきとした日本の公務員なのだよ」
嘘だろ、さっきの奴も公務員だと、そうこの人は言うのか。
もしかして下請けで暴力団でも使っているのかな？
「いきなりオカルトな発言になっちゃうけど、職務内容は一言で言えば陰陽師の末裔ってやつかな」
「陰陽師ってあの平安時代に居たような？」
「ご明察。異常物体、怪奇現象、特殊生物を取っ捕まえるか駆除するお役目を遠いご先祖様から代々受け継いできたって寸法なのさ」
インテリなお姉さんがカルトっぽいことを言うとなおさらヤバめな雰囲気になるのはなんでだろうか。
しかし、これだけの規模の拠点と人員を揃えている段階で、この人個人がヤバい人だという話では終わらない。

「ええ、いや……陰陽師ってもっとこう、宗教的な感じでは？」

自動ドアしかり監視カメラしかりこの部屋はハイテクな匂いがする。

この人もそんな風には見えない。

「そりゃあ当然だ。私は科学畑の人間だからね。時代の変遷と調和した結果ってやつだよ。オカルトにやられっぱなしもムカつくだろう？」

「ははあ……」

東の視線がギラつく。

これだけは本音かもしれない。

ランプが灯り、壁を構成する金属パネルが展開した。

「む、来たか」

人の手を介さず物資を投入出来る機能のそれに、今は湯気が昇るドンブリが二つのトレイに載る。

「食事が美味しいのはウチの自慢なんだ。メニューも豊富だし、こもりっぱなしでも飽きない」

トレイを拾って机に置いた。

メンマとネギとチャーシューが添えられ、店で出されるような醤油ラーメン。

「右手が使えなくて不便だろうが食べてくれ。私も食べる。ここのラーメンはとても旨

いぞ」
東はプラスチックの箸で麺を啜る。
光もそれに倣う。
「……うんまっ」
あっさりしつつも鶏ガラが香る醤油スープが絡んだ細麺。
空腹スパイスが効いているのかやたら美味い。
べらぼうに美味い。
並んで食べるどこぞの名店よりもずっと美味いぞ。
懐かしい文明の味にがっついた。
「実に美味そうに食べる」
「好物ですから」
東が机をグーでぶっ叩いた。
「そう。重要なのはまさにそこだ。君に敵対的な意識は無い。出歩くだけで文明を破壊する異常性を帯びた君でも方法次第では今後もラーメンを食べられるのを踏まえ、聞いてくれるかい？」
眼がキラキラしてかなりの熱がこもっている。
ラーメンを交渉材料にする誘拐犯とは新しい。

「君は特殊だが、似たような前列はそれなりにある。こういう場合、我々の中で三つの意見に割れる」

そこまで言って、一気に残りの麺とスープを喉に流し込む。

「解剖、つまり殺すか、眠らせて闇に葬るか、生かして利用するか。毒を以て毒を制すわけだ。それで過去に大失敗もしてるが……今のところこれが最善だ」

「ひ、酷い」

「確かに酷い。独善的と罵っても良いよ。だけども世界平和は綺麗事じゃ保てない。ちなみに私は三つ目の支持者だ。最大の味方だと思ってくれていい」

「僕に人権は」

「残念だが、君が人類文明を著しく脅かす物体となった時点で地球上のどの国家でも消滅したよ」

退路まで断たれた。

「切り離すにしても破壊するにしてもとても困難だけど、有害性を抑える技術を我々は有している。協力する意志が君に有るなら第三の選択肢が俄然有力になる」

「協力って何をするんです?」

「実験は多岐に渡るから一言じゃ難しいが誓って残酷なことはしない。痛め付けたりもしないし、衣食住や精神活動の自由は保証する。ゆくゆくは焼き肉を食べに行っても問

題なくなるだろう」
　堂々と実験と言ったな。
　事実上、死ぬか実験台にされるかの二択じゃないか。
　こうまで丁寧に説明してラーメンを食わせてくれるならそこまで悪い扱いにはならないと期待したいが。
　今与えられた唯一の自由のラーメンを食べる。
　光はしかめっ面を通り越した無表情でスープの一滴も残さず平らげた。
「一つ、僕からも質問させて下さい」
「良いとも」
「なんでそんなに親切にしてくれるんです？　殺したほうが後腐れがないでしょう？」
「劇薬は適切に扱えば薬。それが自然界では猛毒となるものであってもだ」
「世界の破滅がその程度の扱いなんですか？」
「だからこそだよ。恐ろしさから眼を逸らして進歩はない。失敗から学び、次に生かす。新技術がいかに危険に満ちていようとも、我々は原始人には戻れない」
　この人には強い信念がある。
　光はなんとなくそう思わされた。
「実際は恥ずかしながら猫の手も借りたいくらいに人手不足でね」

グロスを薄く引いた桜色の唇を曲げて明るく自虐する。
「答えは急がなくていい。考える時間が必要だろう。また明日来るよ。収容室を変えるように言っておくから次はもっと明るくて落ち着く部屋で話せる。三食の内容も出来るだけ希望を叶えよう」
東は立ち上がりトレイをカーゴに戻してパネルを閉じる。
「色好い返事を期待するよ。ではまた」
ヘルメットを拾って出ていってしまった。